



藤香会だより

第37号

令和6年7月1日発行

発行者
一般社団法人 藤香会
事務局

092-724-0007

発行責任者
毛屋 嘉明

令和6年度総会が開催されました

令和6年度総会が5月26日(日) 11時より天神ビル11階会議室で開催されました。

総会員数264名(内賛助会員56名)の内、出席会員53名、委任状提出会員122名の合計175名で、総会員数の2分の1以上となって総会が成立しました。

国歌斉唱に続いて昨年度亡くなられた会員2名(小川義晴様、瀧口宗芳様)のご冥福を祈り1分間の黙祷。毛屋副会長が開会を宣言した後、



審議する会員たち

山崎会長の挨拶があった。当会発足当時からいろいろな活動して来ましたが、今年も本日の3号議案にもあるように活動をするに際し、昨年の総会でご賛同いただいた会費の値上げをすることで皆様にはご負担をお掛けするのを心苦しく思っております。ひとえに文化の振興活動を活発にやりたいとの思いであり、郷土発展のため皆様には今年もよろしくお願い申し上げます。

議案は理事会案通り全ての議案が承認された。毛屋副会長より、基本計画案について今年も長政公の法要や、黒田家と関係の深い神社大祭の参詣等藤香会の事業は着実に執り行いたいとの表明があった。「福岡城復元の検討に対する協議会」が福岡商工会議所の提言により発足したばかりで、天守閣があったということになれば改めて議論が進んで行くことになるうとの説明があった。



役員退任にあたり思い出を語る大島さん

役員退任にあたり思い出を語る大島さん。役員を退任された長年にわたって理事を勤められ、また監事として本会の業務執行状況の適切な指摘をいただき、本会の発展に尽力して来られました。忠之公ご

法要の折には、講話で忠之公の生い立ちなどを語っていただきました。また会員で褒章を受けられた博多織工業組合理事長の原田昌行さん、囲碁ボランティアの松村緑さん(緑綬褒章)に花束を贈呈しました。人事は次の通りです。

会 長…山崎 拓
副会長…毛屋嘉明
事務局…田島満行(局長)
松尾 等

理事…(総務) 西田経敏 栗山順子
(研修) 田中崇和 吉田征則
(広報) 天本孝久 中村照久
(会計) 郡 基博 秦 紀子
因幡敏幸 岳 康宏 徳永良子
森 純子 村山由美 関 賢二(新)
監事…馬頭徹夫 田中雅美



講話する占部賢志さん

講話する占部賢志さん。参列すべきだと思ふと話されました。日本人は、死ぬばみんな仏さま、神さまになり、それを生きた人たちが祀るといふ精神構造がある。知らなかったこととは、言え、弔ってくれ



如水公法要で墓前に参拝する会員

理事ほか会員30名で墓所の清掃を行いました。この日は霧雨の小寒い天気でしたが、皆さんの協力のおかげで墓所がきれいになりました。



忠之公法要に参列した会員

この3月20日は陽射しはあるものの寒の戻りの寒い中でしたが、本堂での法要の後、裏手にある黒田家墓所の如水公の墓前に会員が集合し、僧侶の読経の中、全員で焼香をいたしました。なお、法要に先立つ3月17日(日)、

墓所のある崇福寺本堂で長高様ご夫妻のご臨席のもとで会員55名が参列して執り行われました。この3月20日は陽射しはあるものの寒の戻りの寒い中でしたが、本堂での法要の後、裏手にある黒田家墓所の如水公の墓前に会員が集合し、僧侶の読経の中、全員で焼香をいたしました。なお、法要に先立つ3月17日(日)、



如水公法要で挨拶される長高様

忠之公のご法要は命日の2月12日、菩提寺の東長寺で第16代当主長高様ご臨席のもと会員50名の参列で、如水公のご法要は同じく命日にあたる3月20日、黒田家

忠之公第371回御忌法要および如水公第421回御忌法要

ている人たちに感謝すべきだとの感銘の深い講話であった。

漂流日記 (上)

薩摩藩の人たちの漂流
会員 天本 孝久

海に囲まれた日本では昔から漂流事故は枚挙に暇がないほど発生している。しかし帰還できた人が限られ、また江戸幕府の鎖国主義・キリスト教禁教政策があったため、記録として現存するものは少ない。

江戸時代の代表的な漂流物語・漂流日記として3回にわたって取り上げる。

最初は薩摩藩の漂流日記である。この中に2つの日記が含まれる。

ひとつは商船(貿易船)で沖縄から帰国の途中で遭難して清国に漂着したケース「清国漂流図」(早稲田大学蔵)と、もうひとつは薩摩藩士が沖永良部島の島番の役目を終えて帰国する途中に朝鮮に漂着して帰国するという日記「朝鮮漂流日記」(神戸大学付属図書館蔵)である。双方ともデジタル・アーカイブにより公開されている。

「清国漂流図」では、薩摩の船が琉球・那覇



清国漂流図_挿画と日記 (早稲田大学蔵)

を出帆した後、大風に遭って漂流し中国・長江(揚子江)河口に漂着して救われるという航海日記を主とした絵物語である。当時の清国の様子が薩摩の絵師によってかなり正確に描かれている史料である。

序文は橋口善伯祥甫が、文化七(1810)年七月の出帆・漂流から十二月の帰国までのあらましを解題として漢文で記述し、本文もおそらく橋口が聴き取って記述したものと思われる。橋口の人物像は不明であるが、鹿児島大学名誉教授・故原口虎雄が著わした「三國名勝図会索引」(青潮社)に、御記録奉行の橋口善兵衛兼柄が「三國名勝図会」を撰進し、父親で編纂総裁であった橋口市正兼古が同時代に登場するので、その父子のいずれかではないかと思われる。父子とも薩摩藩の御記録奉行や町奉行を歴任した有能の士であり学者であった。

挿画は左近允純暇(さこんじょうじゅんか)、西清美(にしせいび)、肥後盛邑(ひごせいゆう)が描いたと橋口は序文に書いているが、人物像は不明である。この人物については鹿児島大学名誉教授原口泉(現鹿児島県立図書館長で、原口虎雄博士のご子息)に問合せたが、史料が見つからない。

この日記の特徴は毎日の出来事が詳細に記され、天気・風向きや流された方角や島や陸地の山が見えた時刻や清国の建物の特徴、風俗などが克明に記録されていることである。船長・森山貞次郎が書いていた航海日誌を清国上陸後も書き続けていたと思われる。

上陸後に清国の役人に各地を連れ回されるが、これは漂着した省(江蘇省か浙江省)が明確でなかったり、管轄の部署が不明だったり、上級役所が別の地区にあったりしたことによるこ

とのようである。連れて行かれる場所々々で市場、商店や工場を見たりする。そのたびに製品や商品の値段を書き留めている。これは商人根性からかもしれない。また応対・取り調べを行なう役人の様子、帽子の飾りを見て役人の地位を確認する余裕もある。そして役人を官長、官人、官役、役人、小役人と書き分ける。

宿泊する施設はお寺であったり関帝廟であったりするが、その周りにはいつも見学者が絶えない。それらの市中の人びとの交流が始まり、料理や酒をふるまわれ、文物を贈られる。貞次郎たちも刀を見せたり、袴などをお礼に渡したり、下手な絵を描いて渡したりする。それは国と国との公式な外交とは違った個人的な交流の記録である。

やがて5カ月後の十二月になって、当時の国際貿易港であった浙江省乍浦(杭州と上海の間)から帰国する。その航海でも中国の船の構造を日本のそれと比較して、嵐にも耐える船を驚きを持って見ている。

もうひとつの「朝鮮漂流日記」(神戸大学蔵)は文政二(1819)年六月に沖永良部島での役目を終えた薩摩藩士・安田喜藤太ら24名が藩の船である亀寿丸(17反帆・1反は幅が3尺の布)で帰国の途中、朝鮮・忠清道庇仁県馬梁鎮付近(現・群山市の北方)に漂着するという内容で、全文が漢文で記述されている。当時の沖永良部島は琉球国に属し、安田の漢文の素養はその職務上必要だったものと思われる。

やはり真水を求めるサバイバルが記述され、上陸して飲んだ水が「天下第一品」と記述される。「朝鮮漂流日記」には海水から「らんびき(蒸留器の一種)」によって真水を一昼夜に1斗(18リットル)作ったと書かれ、「清国漂流図」の記述の1斗5升に比べると少ない。

朝鮮上陸後は、漢城(ソウル)から倭学訳官が派遣されて取り調べられるが、やがて釜山に向けて出船し、慶尚道多太(ママ)浦(現・釜



朝鮮漂流日記 (神戸大学蔵)

山広域市沙下区多大浦)に到着、そこから釜山・牛岩浦(現・同市南区牛岩洞)に移動して対馬藩の保護下に入り、翌年正月に対馬府中(現・厳原)に到着、二月に長崎に戻った。

庇仁県馬梁鎮で応対した朝鮮側役人は訳官以外にも10名ほど記述されているが、庇仁県監・尹永圭との対話が詳細で多い。薩摩・国分産の煙草や琉球泡盛をすすめ、船室に掲げられている日本画についての問答がある。安田が贈った和歌の短冊を見て「龍が跳び、蛇が走るような美しさ」と書かれている文字を評価し、安田が持っていた周易大全を見ては「日本では文と武ではどちらを尊ぶか」と問い、「武であるが、天下国家を担うには文も必要である」などの文化の違いに対する問答もある。

倭学訳官は日本語はできるが、文化的素養はあまりなかったとみえて親しく交わっていない。日本でも朝鮮でも漢字文化圏の共通性と学識、教養を持つ人に対して相互信頼の関係が醸成されて尊敬する傾向があったと言えよう。

宗家文書である「毎日記(館守日記)」は日朝関係に関する表(おもて)の交流の記録があるが、この「朝鮮漂流日記」は舞台裏での民間外交記録とも言えるものである。

黒田武士掃苔録(1)

三浦 明彦
(郷土史家 藤香会会員)

はじめに

今から487年前の1587年、播磨(現兵庫県)から九州へ入封した人物がいる。人物の名は黒田孝高という。通称は官兵衛、剃髪号は如水で広く知られる人物でもある。

この人物は、作家司馬遼太郎の歴史小説「播磨灘物語」の主人公として、また2014年のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の主人公として、現代人、とりわけ歴史好きの人々の脳裏に深く刻み込まれた。そして今一つ、この人物は、すなわち黒田孝高は424年前の1600年になると、当時の九州最大の商都博多へ就封されて来る。さらに博多の隣接地帯に新しく城下町を作り、福岡と命名した。これにより、九州に商人の町「博多」と武士の町「福岡」が誕生し、やがて福岡市へと発展して、現在に至っている。全国的にも珍しい福岡の街、いわゆるツインシティとなった。現在日本でも有数の都市、福岡市となり、ビジネスの街福岡の顔と観光の街博多の顔を持ち、ツインシティとしてその歩みを続けている。

ということ、このツインシティの歴史を振り返ってみる時、外せない人物として、やはり黒田孝高が浮かび上がってくる。ドラマの影響で通称の官兵衛の通称が良くなっているが、地元福岡の街では古くから剃髪号の如水の方が通りが良く、老舗菓子店の屋号は「如水庵」、地酒(日本酒)の名品として「如水」が存在する。これは言うまでもなく如水に因んだものである。つまり大げさかもしれないが、九州最大の都市である福岡市、福岡の街は黒田孝高(官兵衛・如水)によって礎が築かれたと言っても過言ではない。

そこで福岡の歴史を遡り、振り返りつつ、あることをしてみたい。それは黒田孝高と共に戦野を駆け巡り、あるいは町づくり、領内

統治に活躍した武士たちの掃苔巡礼を行うことである。

著者の出来得る範囲内のことのみであるが、「黒田武士」と言える男たちの墓所を巡り、掃苔供養を行いつつ、温故知新巡礼である。

ここにその黒田武士たちの墓所を写真で紹介しつつ、合わせて人物像も簡易文ではあるが記してみた。すなわち、掃苔巡礼紀行として一文にまとめたものである。

1番 黒田孝高(くろだよしたか)

1546~1604

○墓所について

崇福寺・臨濟宗の寺院(福岡市博多区千代)に墓がある。

○名乗りについて

幼名は万吉、通称は官兵衛、実名は祐隆・孝隆・孝高という変遷で表記文字が変わっている。切支丹としての洗礼名がシメオン、剃髪号は如水・円清、法号は龍光院。

○官位について

勘解由次官(かげゆのすけ)を受領している。

○人物略伝

まず、当初は黒田姓ではなく、小寺姓を名乗っている。これは孝高の父職隆が主君小寺則職から小寺姓を下賜されていたこと。孝高の母心光院が小寺政職の養女だったことによる。

よって孝高は、小寺官兵衛孝高と名乗っている。そしてこの時点では、播磨御着城主・小寺政職の重臣で、播磨姫路城を預けられて城代(城主)を務めていた。

戦国の巨大新興勢力・織田信長が中国地方へ進出してくると一早く従属を決断し、主君小寺政職と共に信長に従属する。さらに信長が中国地方攻略の総大将に任命した羽柴秀吉の先導役

に任命され、自身の居城・姫路城を準本拠地として、中国地方攻略に邁進する。

やがて諸々の曲折から小寺政職が信長に対して離反する。この政職の離反の結果、孝高は小寺家を離れて信長に単独で従属することとなり、さらに信長の命令で秀吉の与力となる。

また、この時より黒田姓に復し、黒田官兵衛孝高と名乗る。以後秀吉の軍師・参謀として手腕を発揮、秀吉から播磨山崎城主として2万石を与えられる。淡路攻略戦、備中高松城攻め、山崎の合戦、大阪築城の監督、四国征討の軍監といった合戦や役目で功績を上げる。

この頃には山崎城主4万石に増加されており、羽柴秀吉改め豊臣秀吉の天下統一に貢献して行く。九州征伐でも軍監を務め、九州平定後には豊前国の内6郡で12万石を与えられ、播磨から九州の豊前に移る。豊前は初め時枝城へ入り、仮本拠した。その後、馬ヶ岳城、法然寺を居城・居所とし、やがて中津城を築城して、それを豊前における居城とした。

中津城主となつてからは、豊前国人衆の反乱を鎮圧し、讃岐高松城、安芸広島城の築城指導を行う。関東の小田原城攻め、肥前名護屋城の縄張りを担当、続いて朝鮮出兵(文祿の役)では外征軍の参謀となる。しかし在鮮中に外征軍の奉行衆の一人・石田三成と対立、参謀の任を解かれ、謹慎の上、剃髪して「如水円清」と号する。その後、第二次朝鮮出兵(慶長の役)では外征軍総大将の小早川秀秋の後見役となる。

1600年、55歳の時に豊臣方、徳川方の動乱(関ヶ原の合戦)が勃発、孝高改め如水は、領土拡張を視野に入れて九州席巻を開始する。すなわち旧領回復を目指す大友義統(吉統)を豊後石垣原の合戦で破り、義統を捕虜にする。さらに軍勢を進めて豊後安岐城、同富来城、同府内城を接収、続いて豊後日隈城、同角牟礼城も接収する。また豊前香春岳城、同岩石城、同小倉上城も攻略し、豊前・豊後後の二か国を手中に納めた。こうして九州席巻の足場を固めた

如水は、さらに駒を進め、筑後久留米城を接収、筑後江上八院の合戦では戦いを督戦、筑後柳河城主の立花統虎(宗茂)を降伏させた。

勢いを増した如水は、その後も柳河城、江ノ浦城、内山城、山下城といった筑後の諸城を接収して行った。このように如水の進軍は止まらず、降伏した立花統虎を先鋒にして、友軍・加藤清正と共に肥後水俣に着陣し、薩摩の島津龍伯(義久)に迫ろうとしていた。だが中央の決戦で、豊臣方主力を破った徳川家康から停戦の命令が出たため、如水は進軍を中止して、居城・中津城へと引き上げた。斯くして如水の領土拡張戦は終了し、あわよくば天下に号令しようとした如水の野望は潰えた。

その後、息子の長政が筑前の国主に栄転すると、長政と一緒に筑前へ入封する。長政は名高城に入城し、如水は太宰府天満宮の境内に草庵を建て、そこを仮住まいとした。やがて長政が福岡城を築城すると、同城の三の丸隠居屋敷で余生を過ごす。だが体調を崩し、攝津有馬温泉へ赴き、湯治療養を行う。2か月程の湯治を終えて京都伏見の黒田邸に入り、再び療養生活を行う。

慶長九(1604)年三月廿日、伏見の黒田邸にて病のため隠没する。享年59歳。亡骸は京都大徳寺の塔頭・龍光院に埋葬された。また、国元福岡の菩提寺・崇福寺にも分骨の上、墓が建てられた。



黒田孝高の墓
(福岡市・崇福寺 黒田家墓所内)

会員クリック③4



理事 紀子 秦

会員の皆さまは、黒田家に対しての畏敬の念... または郷土史への探求心をもって、藤香会に入会されたものと思います。

また祖父が亡くなった後は、母の諸岡京子が理事をさせていただいておりました。

母が亡くなった時は、藤香会とは縁が切れるものと思っておりましたが、毛屋副会長から「お爺様、お母様から繋いだものがあるので、会員を引き継いでほしい」と言っていたので、会員として在籍するつもりでありました。

ところが、篠原前理事から急に「私が会計を引き受けるので、あなたが帳簿付けをしなさい」との依頼があり渋々受けることになったため、理事の一員となり今日に至っております。

鳥飼八幡宮の宮司の三男として生を受けた祖父が、藩士でもないのに藤香会の活動に生涯取り組んでおりました。

ちよつとつんちく

この福岡・博多には国名の付いた堀が2つあります。ひとつは福岡城の防御のための肥前堀ともうひとつは博多を防御する役目の房州堀です。

房州堀は国名ではなく、それを掘った(企画・指揮した)人の名前です。豊後大友家の家臣である白杵安房守鑑摩という人物が掘ったと、「石城志巻之二(津田元願・元貫父子編 1765)」に書かれています。

この白杵安房守は御笠川が比恵あたりで西に向かって流れ水害が多かったのを、博多湾に真直ぐに注ぐよう、現在の石堂川と呼ばれる川を掘ったことでも有名である。



「石城志」の房州堀の記述部分 (国立国会図書館蔵)



房州堀の記述の続き ~白杵安房守の人物像の記述

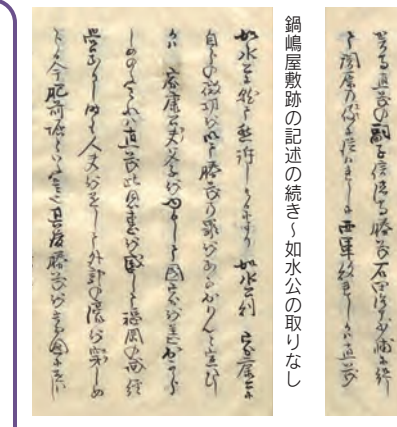
また博多の堀には宗屋濠 古屋濠といわれる堀がある。これも安房守が徳永宗屋古屋某に命じて掘らせたところがあるが、古屋某はどのような人物かは詳細は分らない。

「石城志」の鍋島屋敷跡の記述部分 (国立国会図書館蔵)

り組んでいた事が本当に不思議でした。鳥飼八幡宮は黒田長政公の別邸を建築の際に現在の場所に移築された事、そして本家筋あたる平山家の紅葉八幡宮も黒田光之公との縁があり、黒田藩のお陰で二社とも現在に至っていることへの感謝の気持ちで、祖父を藤香会及び郷土史へと突き動かす原動力になったのではないかと、近頃やっと理解できたように思います。

現在私は理事として藤香会に深く係わることになりましたが、会員の皆さまの黒田藩に対する深い思いと知識の豊富さに、ただ驚くばかりです。学びの途中の私ですが、微力ながら藤香会のお役にたっているならば幸いに存じます。

ふたつめの肥前濠(佐賀濠)は佐賀藩が黒田の恩義を謝して、如水・長政が福岡城を築く際に佐賀より人夫を派遣して掘ったもので、現在のソラリアステージ↓市役所↓天神中央公園↓薬院新川と東西に掘られた濠である。



鍋島屋敷跡の記述の続き~如水公の取りなし

★新規入会員紹介

- 1. 一般会員
宮口 佳織 三浦 明彦
山田 明 測上 紀行
山口慶太郎
2. 賛助会員 52企業・団体

編集後記

今号よりページを増やして、福博の歴史に関する記事を連載することになりました。記事を集める苦勞もありますが、でき上がった時の充実感もあります。(天本記)